先德餘香

後學南條文雄集記

畫蘭二十一絕句

雲華院大含講師

一 一花又一葉。不可徒看過。灑出逸然氣。精神何用多。

二 我畫無師法。幽蘭自作家。如何形似者。動汗楚人花。

三 水墨唯蘭竹。平生見(一作養)素心。塗鴉經內(一作御)覽。野雀躍中林。(出豐繪詩史)

四 不顧它嗤笑。從前畫國香。何圖天闕上。御覽筆生光。

五 水墨癡心深。生平獨寫蘭。居然何處喜。不入俗人看。

六 遙思高隱士。手寫一叢蘭。志邁清風處。芬芳墨不乾。

七 胸中書卷氣。半點墨生光。目下無丁字。爵媒亦不香。

八 水墨清煩惱。凡僧夢不知。時遭人指笑。漫筆亦隨宜。

九 我竹唯隨意。吾蘭不用工。何須人取舍。獨坐兩清風。

一〇　念佛心非石。　染香人似蘭。　吾家安樂法。　喜氣滿芳顏。

（此詩．故攝光院遜堂連枝所錄送）

一一　我有君房墨。　研磨試寫蘭。　清香時滿室。　不用燒沈檀。

一二　畫欲無餘白。　蘭萋竹亦萋。　塗鴉人莫笑。　恐被俗僧題。

一三　蘭花朝帶雨。　裊々幾枝々。　如見捲簾女。　淚痕心恨誰。

一四　國香原不媚。　生在碧山寒。　一落紅塵陌。　盆盂伍牡丹。

一五　無蘭林下路。　素志與誰歸。　帶月高人佩。　被風逸士衣。

一六　芳蘭奇賞足。　培植幾經營。　借問黃瓷玩。　何如碧澗生。

一七　胸中千畝竹。　筆下一叢蘭。　誰認心無象。　分明雅俗看。

一八　一灑胸中墨。　叢生紙上花。　不知千載後。　誰是挹芳家。

一九　擇友唯依石。　同芳獨有芝。　看它刈蕭艾。　一樣束藏薤。

二〇　蘭也令客幽。　客亦使蘭幽。　幽客與幽蘭。　此中幽又幽。

二一　衆草皆爭色。　深抱香。　誰其同臭者。　有客在瀟湘。

無題

佛法薰人。猶蘭染袖。聽已無厭。餐受甘臭。

又

梅呈如是色。石見本來心。

天保(二年)辛卯第三日爲梅外雅契正、

九街光景入初年。剝啄頻々破午眠。臘雪埋山寒尙在。呵毫先寫報存先。

嚴島雜詩

玉女靈宮幾度登。廊懸一百八龍燈。青松白石潮來去。畫裡風光若未曾。

肉侄圓等五十壽詞 (在豐後竹田光西寺所見)

閱過人間五十年。帶將妻子奉金仙。殘生尙仰冥加力。土木場中樂化緣。

癸卯閏月書似肉侄圓等

萱堂應嚙指。往矣愼風波。

五種報恩

父母養育恩、國王覆燾恩、施主信施恩、師長敎化恩、如來濟度恩、

日野亞相藤公(資愛)賜宴賦詩、限韻

高門愛客舊賢聲。喚及山僧豈不行。休謂昏迷難下筆。借光銀燭一堂明

天保三年壬辰(九月二十三日賴山陽病歿于京都)、

十月廿二日聞山陽老兄訃、悵然有作、(五首)

其一

正月第三日。兩回行見君。而今爲永訣。不但歎離羣。

冷雨過林木。寒鴻叫海雲。心期同對雪。把酒鴨河濱。

其二

聞君曾臥病。使我數搖心。杏禱加醫治。何圖接訃音。

憂來天地暗。感至海溟深。恍惚眞耶夢。追懷不可尋。

其三

一朝三樹別。千載九泉悲。袂濕新愁淚。囊收舊送詩。

情親常有信。會見竟無期。北望沈思久。如何嫂與兒。

其四

偶然聞訃翌。同座竹田兄。有感平生誼。無爲後死情。

原知修史業。豈獨主詩盟。共惜天才美。猶欽不朽名。

其五

訃來初忌日。時欲促行裝。歸路力無賴。逝川情自傷。

論交心水淡。問跡道山長。追福非君事。誦經吾進香。

小竹詩中曰、同社元瑞外、春琴亦絶絃、西海隔雲海、雲華與竹田。他日山陽笛、流涕孰後先、第四首意暗合、此併告、　雲華含、

附錄一、雲華山陽交際始末　文雄鈔記

『家庭の賴山陽』(書名、木崎好尙氏ガ、山陽ノ母氏梅颸女史ノ日記ニ據リテ編次セシモノニ左ノ如キ記事アリ)

文化五年戊辰(山陽二十九歲)、豐前の僧末弘大含(雲華と號し、豐後中津領古城の正行寺住)入京の途、來訪して畫幅の賛を求めぬ。

文政改元戊寅(山陽三十九歲)、三月六日、廣島を發し九州行の途に上りぬ。二十四日赤間關より書狀を發し、五月二十三日、長崎に着し云々、赤馬關にては、登岳行の僧雲華に遇ひ、十二月五日、豐前に入り、耶馬溪(山國谷)を過ぎ、永添村古城の正行寺に僧雲華

（末弘大含）を訪ひ、未だ寒喧を叙するに及ばずして曰く、山國なるかな〳〵と、雲華曰く、君更に羅漢を觀ば則ち魂奪はれんのみと、居ること二日、導かれて仙人窟、羅漢寺に遊ぶ、而して山陽觀て樂まず。更に雲華と同じく溪口に溯り、屈智林に還りて阿保村（淨眞寺）に宿り、その翌寺に歸り、三日にして辭去せり。翌年冬、自ら圖卷を作りしが、雲華の有となれり。

文政二年の春（山陽四十歳）、四月十九日晴、陰、大含僧（雲華）來る。二十三日陰、景樹（香川）未頃より來、夜四更頃歸る。閏四月三日陰、後曇、本願寺きこく御殿見にゆく、莊れいいふばかりなし。されど、炎火によりて物あたらしく、きら〳〵敷ばかりなり。書院なんど、丸山（應擧）、吳春、岸（駒）などのもあり。西本願寺は、物ふるめかしく、ひうん（飛雲）閣、庭なんど、東よりはちいさけれど、すさうなり。行かへり共、大がん僧（雲華は眞宗の學頭、雲華院の寓居は枳東園とて、枳殼邸の東に在り）の旅宿により、歸る道より雨ふりて、かごにて歸る。

八日陰、昨夜いねがたく、今朝遲く起きる。晝過より、雨となる。大含、今一人長崎にて心安くせし僧（日藏）來り、饗應。

九日陰、宇治へ出たつ、夫婦のもの（山陽、梨影、龜次郎）つれは大含、日藏、予はかごにのる。

文政四年（山陽四十二歳）、この冬、僧雲華西歸す。

文政七年（山陽四十五歳）の春、竹田の西歸を大阪に送り、二月二十九日、春水の忌辰（壁に春水が精里茶山の詩に和せる疊韻の遺墨を掛く）に、僧雲華來會はせぬ、依韻叙懷の作なり。

九月二十二日晴、嵐山紅葉見に行く、大含僧（雲華）も跡より來る。

十月朔日晴、大含師振廻（舞力）にて、砂川へ往きあそぶ、文房七詠の中、蠻物古銅筆洗は大含の贈る所なり。

○

附錄二、遇大含師（々將東遊土岳、賦此爲贈、此賴山陽詩用山陽詩鈔三之三、文政元年戊寅、）

吾泛火海君富山。　相逢握手赤馬關。　—雖無酒腸海不測。　自有詩格山難攀。

共把醒眼評山海。　采眞歸來重盡歡。　取吾火海火。　融君富山雪。　煎君雲華喫七椀。

四腋生風凌列缺。　與君下視大八洲。　海如蹄涔山如垤。